

## 【福井】救急・総診・被ばく医療の三刀流を築いた医師のキャリア-小淵岳恒・福井大学高度被ばく医療支援センター長に聞く◆Vol.2

救急医療と総合診療の兼任が福井大の特徴

2025年12月3日（水）配信 m3.com地域版

北陸初となる福井大学高度被ばく医療支援センター（福井県吉田郡永平寺町）でリーダーを務める小淵岳恒センター長は、多様性に富む独自のキャリアを築いてきた。祖父をがんで亡くした経験から外科医として手技を高めた後、浪人時代から抱いていた展望を実現させようと救急医にシフトし、さらに総合診療や被ばく医療まで学んだ。「地域には診療科を問わず幅広く診られる医師が必要」と話す小淵氏に、半生を振り返ってもらった。（2025年10月21日オンラインインタビュー、計3回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



小淵岳恒氏

——小淵先生は2000年に福井医科大学を卒業しました。なぜ、医師を志したのですか。

祖父の死と、医学を扱ったテレビ番組に影響を受けました。私は福井県鯖江市に生まれ、実家は洋服店を営んでいました。周囲に医師はおらず、物づくりが好きだったことから高校入学時は工学部を志望していました。転機となったのは、高校3年の頃に見たテレビ番組です。今でも名前を憶えており、それはシリーズで放送されたNHKのドキュメンタリー番組『驚異の小宇宙 人体』でした。

「医学ってすごく興味深いな」と感動した私は、中学時代に胃がんで亡くなった祖父を思いました。がんが見つかった時は既に末期であり、「もっと早く病気が見つかっていれば、おじいちゃんは助かったんじゃないか」と疑問を感じたことを思い出しました。医学部を目指すには少し遅かったかもしれませんが、高校3年の夏から身を入れて勉強するようになり、2年間の浪人生活を経て福井医科大学に合格しました。

——資料によると、卒後5年は一般消化器外科医だったそうですね。

祖父を亡くした影響からがんの手術にとっても興味があり、大学入学時から外科医になりたいと思っていました。それで卒業後は福井医科大学医学部附属病院の第2外科で研修を受け、その後、滋賀県の長浜赤十字病院の外科に勤務しました。自分の技術で患者さんを助けられる外科医の仕事にはやりがいがあり、実際に手術によって助かった患者さんはたくさんいました。しかし同時に、手術をしても、また化学療法を行っても救えなかった方もいました。卒後5年目には外科認定医を取得し、「外科だけでなく内科や小児科なども学びたいな」と思うようになりました。

医師として次のステップに進もうと決意したのはその頃です。私は福井っ子であり、浪人時代から将来は地元に戻って地域医療に貢献したいと展望を描いていました。地域には診療科を問わず幅広く診られる医師が必要です。「がんの前段階から患者さんと関わりたい」「家庭医療や予防医学を学んで、地域に必要とされる医師へと成長していきたい」思いが強くありました。ちょうど医局の人事で福井に帰る話が持ち上がったので、福井大学医学部附属病院の救急部へ籍を移しました。

## 総合診療科の講師を経てセンター教授に

——病院のホームページによると、福井大学医学部附属病院では救急部と総合診療部を合同で運営しているといいます。珍しい組織形態だと思いました。

「救急医療を行いながら総合診療をする」のが当院の特徴の一つであり、全国の大学でも珍しいと思います。救急室を受診する患者さんのおよそ1割は実際に緊急治療が必要であり、救急医が初期診療をするのが望ましいですが、9割は緊急治療の対象ではないものの何らかの診療を行わなくてはならないため、総合診療医による対応がベターです。こうした現場の実情を考えたとき、「軽症・重症を問わず、救急室を受診する全ての患者さんのニーズに合った初期診療ができるように」と、救急部の医師と総合診療部の医師が合同で「救急初期診療部隊」を構成しています。私が救急部に在籍してから総合診療部が立ち上がり、部内では救急医療と総合診療に携わる人員を入れ替えながら運営しています。

このような組織で私は救急医療と総合診療の経験を重ね、2018年からは救急部総合診療科の講師を務めてきました。そして、2025年7月に高度被ばく医療支援センターの教授に就任した次第です。

## 「救急と被ばく医療ができる医師は福島へ」の号令にわずか15人

——外科、救急、総合診療とフィールドを変えていく中、被ばく医療はどのように学んでいったのですか。

福井という土地と文化が後押しをしてくれました。2004年に県内で起きた美浜発電所3号機の事故を受け、「原発でトラブルが起きたときに対応できる医療者が必要だ」という人材育成の機運が福井に高まり、被ばく医療を学び伝えていく文化が少しずつ醸成されていました。私も縁あって東京都に本部を置く公益財団法人・原子力安全研究協会の方から「福井で被ばく医療を盛り上げていきませんか」とお声がかかりました。地域医療を志向していた私は「ぜひ学びたい」と同協会や県、国の支援を受け、2009年に米国テネシー州オークリッジにある被ばく医療の研修施設「REAC/TS（リアクツ）」に短期留学をさせていただきました。

この時は私を含めた福井大の先生5人ほどが施設に赴き、1週間ほどのコースを受講しました。被ばく医療の深いところを学べたうえ、コース修了後も3か月にわたって病院の救急外来などで研修を受けることができ、アメリカの医療システムを体験できたのは大きな収穫でした。帰国後は同協会と一緒にREAC/TSで学んだことを生かしながら全国各地を回り、被ばく医療の知識や技術を伝えていきました。

その2年後に起きたのが、東日本大震災です。過去に学んでいた被ばく医療は労働災害のようなシナリオで、「作業員が階段から落ちた」「重量物を運んでいた時に倒れて怪我をした」といったものでした。巨大地震や大津波、原発のメルトダウンや水素爆発が重なるという複合災害は想定されておらず、「まさかこんなことが起こるとは……」と絶句したことを覚えています。

「救急医療と被ばく医療ができる医師はすぐに福島に集合してください」——。国からの招集で、現地に集まったのは全国からわずか15人ほどでした。しかもその半数近くは福井の出身で、私と同じようなキャリアをたどった人たちでした。「救急医療と被ばく医療の両方ができる医師はこんなに少ないんだ」と、日本の医療体制の課題を肌にした瞬間でした。

### ◆小淵 岳恒（こぶち・たけつね）氏

2000年福井医科大学卒。同大医学部附属病院第2外科、長浜赤十字病院外科を経て、福井大学医学部附属病院救急総合診療部で救急医療と総合診療に携わる。2018年同院救急部総合診療科講師、2025年7月から福井大学高度被ばく医療支援センター教授。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太（写真は同センター提供）】

